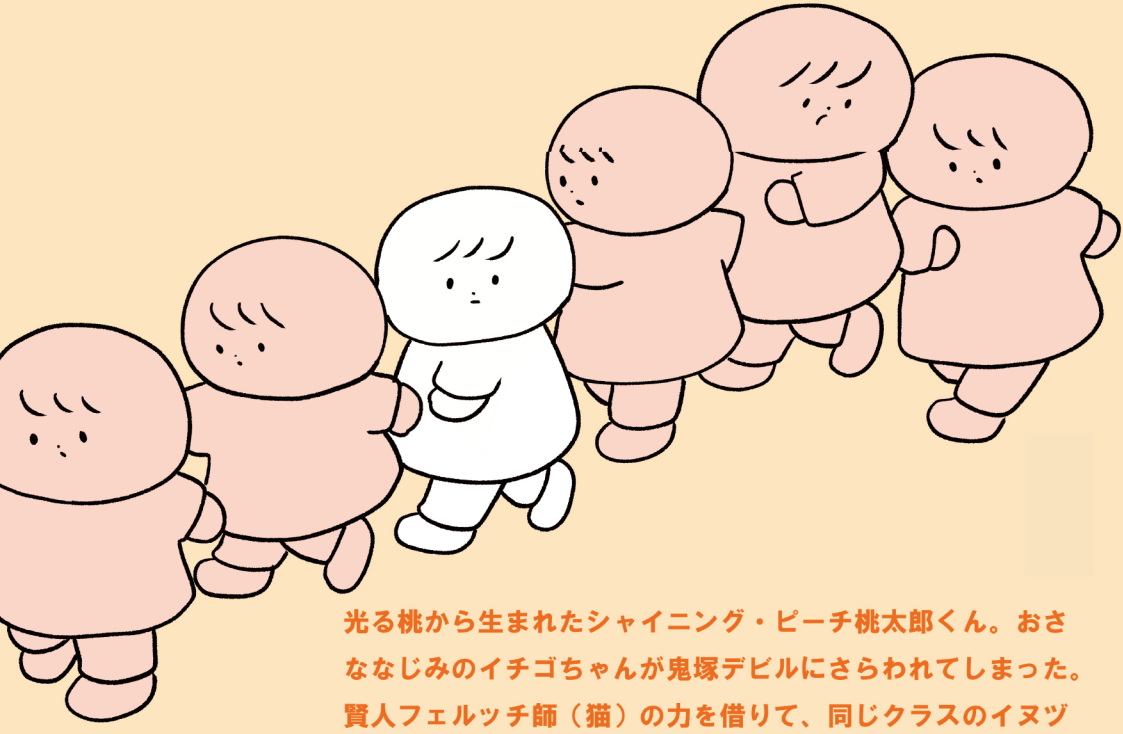
昔話で読む

サイコシンセシス

あかるい
心理療法

安田 登
と チームうみまち



光る桃から生まれたシャイニング・ピーチ桃太郎くん。おさななじみのイチゴちゃんが鬼塚デビルにさらわれてしまった。賢人フェルッチ師（猫）の力を借りて、同じクラスのイヌヅカくん、サルタくん、キジマさんとの救出作戦。古今東西の古典をパクリぱくってお届けする快作！

昔話で読む　あかるい心理療法

サイコシンセシス

◆◆◆目次◆◆◆

第一章　桃太郎と自己同一化　……P.7

―桃から生まれた桃太郎
　＊コラム「光る君とかぐや姫」
―シャイニング桃太郎、フェルッチ師と出会う
　＊コラム「猫のフェルッチ師」
―人気者の桃太郎
　＊コラム「たけくらべ」
―イチゴちゃんの失踪
―犬・猿・雉たちと鬼退治に出かけるぞ！
　＊コラム「経済的徴兵制」
―鬼塚、こわい！
―フェルッチ師、自己同一化を語る
―イヌヅカ君、脱同一化で怪傑ドッグ・マンになる
―桃太郎くんの脱同一化
　＊コラム「雲と龍」
―めでたし、めでたし

解説　同一化と脱同一化　……P.59

第二章　栗太郎とサブ・パーソナリティ　……P.71

―明るい栗太郎くんが悩んでいる
―栗太郎くんの第一の悩み
―栗太郎くん、催眠療法を始める
―お婆さん、重体に
―栗太郎くんの出生の秘密
―サブちゃんとセルフ

解説　サブ・パーソナリティとセルフ　……P.95

対談　大島淑夫×五味佐和子　……P.119

参考文献

はじめに

最初にお断りしておきます。本書は私、安田登が好き勝手に書いた本です。こんなにも勝手に書いた本ははじめてです（笑）。「ZINEだからいいよね」と、いい気になってやってます。「もっと読者のことを考えて」とか「そんなに勝手に書いちゃダメだよ」という編集者もいません。売れるか売れないかも考えていません。

…というわけで、「もっとちゃんと書け！」というお叱りは受けかねますので、悪しからず。

さて、本書は桃太郎をはじめ、犬、猿、雉らの『桃太郎』の登場人物たちが、イタリア生まれの心理療法であるサイコシンセシスによって成長し、そして鬼塚デビルにさらわれたイチゴちゃんを救出するという物語です。

サイコシンセシスって、ほとんどの方がご存知ありませんね。サイコシンセシスについてのZINEは次号に出す予定ですが、簡単な説明を次のページに書いておきます。

今回の物語で、桃太郎らにカウンセリングをするのは猫のフェルッチ師。フェルッチという名前は、サイコシンセシスの創始者であるアサジオリの後継者のひとり、ピエロ・フェルッチさんから（勝手に）お借りしています。

あ、ちなみに本書でサイコシンセシスの話が出て来るのは40ページあたりから。それまでは創作昔話ですので、「ダマされた！」と怒らないでください。

サイコシンセシスとは

サイコシンセシスとは何かをひとことでいえば「あかるい心理療法」です。

C. G.ユングとほぼ同時代人である、イタリアの精神科医ロベルト・アサジオリによって創始された心理療法です。フロイトやユングは「サイコ（精神）アナリシス（分析）」、すなわち精神の「分析」をします。それに対してアサジオリは「サイコ（精神）シンセシス（統合）」、分析だけでなく統合をしちゃおうという心理療法なのです。

私たちの心の中には、矛盾した、相反するさまざまな力が動いています。

あるでしょ。「あれをしたい。でも、同時にこれもしたい」って。

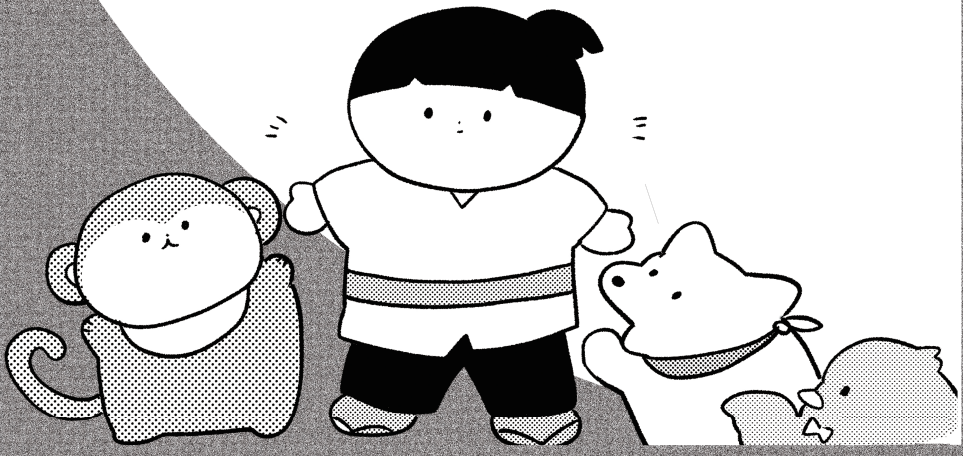
そんなさまざまな力を上手に制御し、さらには調和させようとする《統合センター》のようなものも自分の心の中にはあるとアサジオリはいいます。《統合センター》の統合が「シンセシス」です。

さまざまな自分をむりやりにひとつにまとめるのではなく、さまざまな自分がいることを認めながらも、しかしそれを調和させ、統合するようなセンターを、自分の中から探し出し、そしてそれを確立することを目的にする心理療法がサイコシンセシスです。

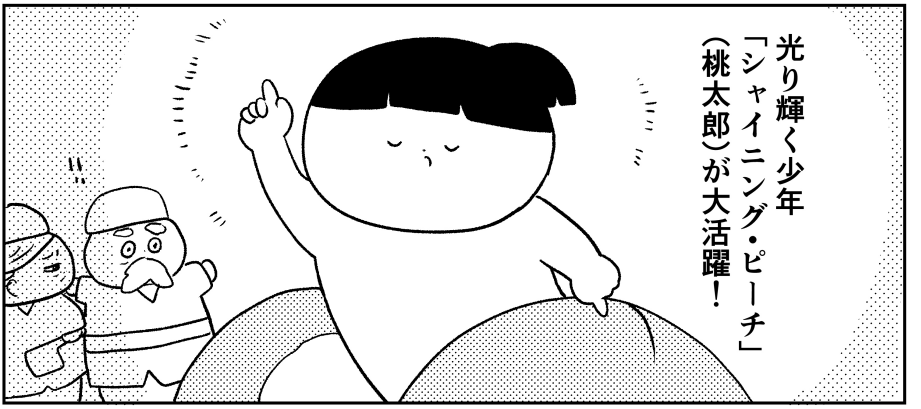
そのために七つのコアコンセプトをアサジオリは提唱しました。詳しくは次のZINEでお話しますが、今回はその七つの中から「脱同一化」と「パーソナルセルフとサブ・パーソナリティ」についてを紹介しながら物語を進めています。

第一章

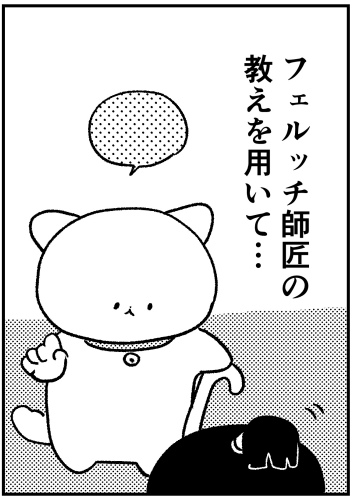
桃太郎と自己同一化

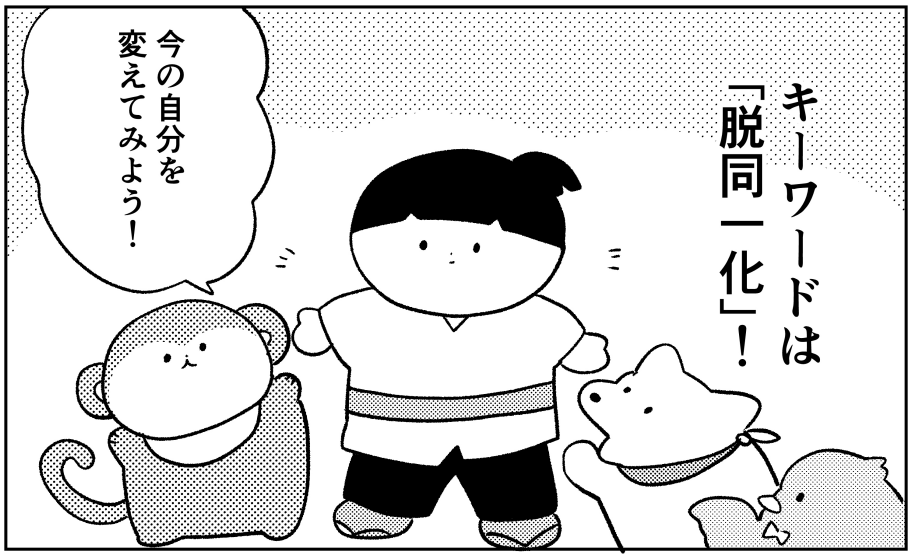


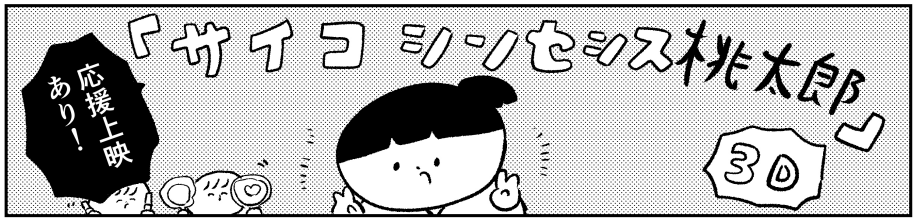
今年の超大作！

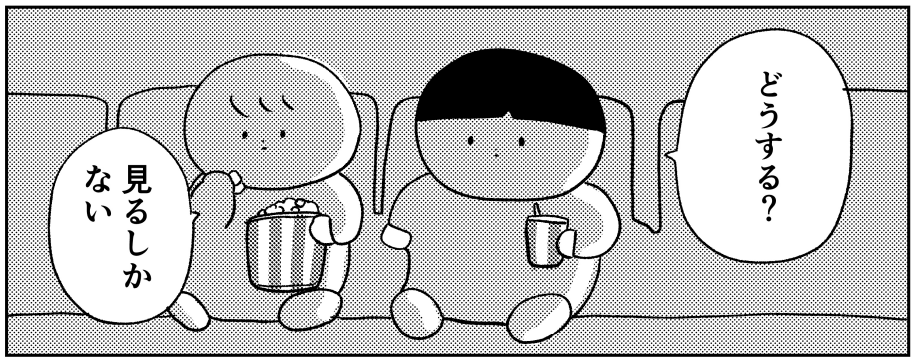

光り輝く少年「シャイニング・ピーチ」(桃太郎)が大活躍！

鬼塚デビルにさらわれたイチゴちゃんを助け出せ！


フェルッチ師匠の教えを用いて…


キーワードは「脱同一化」！
今の自分を変えてみよう！


「サイコ シンセシス桃太郎」
30
応援上映あり！


どうする？
見るしかない

おわり！

桃から生まれた桃太郎

昔々、ある所にお爺さんとお婆さんがいました。

お爺さんは山に柴刈りに行きました。毎日、毎日行きました。雨の日も風の日も行きました。

おとぎ話の『桃太郎』でもご存知の通り、このお爺さん、物語の中での役割はないに等しい。しかし、柴刈りという仕事は存外大切な仕事で、ガスや電気のなかった時代、お風呂を焚くときに燃やすのも柴でしたし、炊事や焼き物、煮物のためのかまどの火にも柴を用いました。それだけではありません。柴刈りは、草刈りとともに森林の環境保全のためにも大切な仕事なのです。

少なくとも、ゴルフ場の芝刈りのアルバイトとは違います（漢字も違うし）。

が、そうはいっても、お爺さんが影の薄い存在であることに変わりはありません。

一方のお婆さん、こちらはお爺さんとはまったく逆の才気活発、頭脳明晰な女性でした。こういう夫婦の場合、お爺さんが尻に敷かれることが多く、かつ、そういう夫婦が得てしてうまくいくものなのです。

さて、そのお婆さん、こちらもいつもの通り、川に洗濯に行きました。

「あ〜あ、面倒だ。いまは男尊女卑の時代だから、あたしゃ洗濯なんかしてるけど、世が世なら大

学に行って研究者になっていたのに」

なんて言いながら、洗濯をしているので、汚れもちゃんと落ちません。

「お爺さんは着物がキレイなのも汚いのもわからないから、ま、いっか」

と、そこに川上から大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこと流れて来ました。しかも、ただ浮いているのではない。まるで生き物のように、あるいは水中に沈み、あるいは水上に姿を現しながら、こちらに漂流して来るのです。

お婆さん、びっくりです。

「ちょ、直径2ｍもあろうかと思われる桃が流れて来たぞ」

だいたいそんな桃が水に浮くものなのか。お婆さんはとっさに浮力を計算します。

桃は流れていく。ゆっくり計算しているヒマはない。お婆さんは桃の形状を、おおざっぱに「球」として計算することにしました。

「えっと。球の直径が2ｍだから半径は1ｍ。となると桃の体積は、体積の公式の半径「ｒ」に「1」を代入すれば求めることができる。

$$V=4/3\pi r^3$$

これは簡単だ。暗算でできる。

次は浮力だ。浮力には体積の他に、その物質、

すなわち桃がどのくらいの深さまで沈(しず)んでいるかの数値も必要だ」

桃はただ浮いているだけではない。時々、水中に没(ぼっ)する。が、どのくらいの深さまで没しているかはわからない。

「あのあたりの水深は案外深い。桃の姿が見えなくなるときがあるということは、一応、水深2mまで潜(もぐ)っているということで計算しておこう。浮力を出すには次の公式だ。

$$F=(P0+\rho h2g)S-(P0+\rho h1g)S=\rho S(h2-h1)g$$
$$=\rho Shg=\rho Vg$$

う〜ん。これはちょっと面倒(めんどう)だ」

なんて計算しているお婆(ばあ)さん。

「あ！」

驚(おどろ)いた。

桃が光っているのです。遠目には気づかなかったけれども、近づいて来るとこの桃、自己発光しているではありませんか。

「宝の桃だ」

もう浮力なんてどうでもいい！光る桃によって、桃太郎の話が『竹取物語』に変わりそうだなんてこともどうでもいい！

「絶対、取って帰るぞ」

お婆さんは水に飛び込みました。

お婆さんは頭がいいだけではありません。運動神経もいい。水泳の名手なのである。古式泳法で桃に向かってすいすい、すいすい泳ぎ行き、無事に桃をゲットしたのである。

が…

「お、重い…」

水中にあったときには浮力があってそれほどでもなかった桃がこんなに重いとは。お婆さんは大汗をかきながら桃を運びます。

「なんで、女のあたしがこんな重労働をしなければならないのよ」

…などと呟きながら桃を運び、やっと家にたどり着きました。宝の桃を部屋の真ん中に置いたお婆さん。疲れがどっと出て、そのままお昼寝してしまいました。

やがて、森林の環境保全活動を終えて戻って来たお爺さん。

大きな桃を見てびっくり！

ひと仕事終えて、喉も乾いている。

「桃、食べよかな」

…と台所から包丁を持って来て、さて、いざ切ろう！と構えた時に、起き出して来たお婆さ

んと目が合った。

「あんた、何してるのよ！」

その剣幕に驚いたお爺さん、思わず手が滑って、包丁が桃に当たってしまいました。桃が柔らかいものだから、包丁の刃はめりめりと桃に喰い込んでいく。

「あ…」

何も悪いことはしていないのに、お婆さんに叱られると自分が悪いことをしているような気になってしまう。それが習い性となってしまっているお爺さんなのである。

「す、すみません。あの…食べようかと」

「こんなキラキラしている宝の桃を食べようだなんて、あんたバカなんじゃないの」

「でも、美味しそうだし」

「これはね、ヤフオクかメルカリに出して、超高値で売るつもりだったのよ。なのに、あんたってば、いつもこうなんだから」

「ご、ごめんなさい」

「もう、これじゃ売れないわよ」

と、このあとお爺さんは散々罵倒され、でも、仕方がないから食べようという話になりました。

「じゃあ、僕が桃を剥くね」とお爺さんが言うと、

「ダメよ。あんたが剥くといつもべとべとにな

るでしょ。貸しなさい」とお婆さん。

お爺さんから包丁を奪い取り、自分で剥き始めます。が、お爺さんが剥くときよりもべちょべちょになってしまいました。直径２ｍの桃ですから仕方ないですね。

あまりにぐちゃぐちゃになったので「ええい、小癪な」とお婆さんが桃をふたつに割ろうと包丁を振り上げると「やめよ！」という声がした。

「え？」

ふたりは顔を見合わせる。

「桃を割るのはやめよ」

どこからの声だろう。

声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも対等だ…なんて夏目漱石（『夢十夜』第三夜）のようなことを考えていると、桃の中から響く声があった。

「我は桃の子、桃太郎である。桃は切らずに、包丁で桃の端っこをちょんと打て。我は生まれ出づるぞとよ」

お婆さんが、桃の端っこをちょんと包丁で打つと、出ました。桃から生まれた桃太郎。

「オギャー！」

もう、大人の言葉は発しませんが、右手には系図が書かれた巻物を持って天を指し、左手は

人差し指を伸ばして地を指さし、天上天下唯我独尊の御姿。

しかも全身からは神々しい光を発しているのです。

お爺さん、お婆さんはびっくりして腰を抜かし、しかし桃は美味しくいただきました。

光る君とかぐや姫

シャイニング桃太郎くん。「光る君」といえば、ご存知『源氏物語』の主人公、光源氏です。子どもの頃の光源氏は、比べるものがないほど美しかったので「光る君」と名付けられました。

そして、光といえば竹から生まれたかぐや姫もそう。彼女の場合は、本当にからだから光を発していて、部屋のすみずみまで暗いところがないほどだったと『竹取物語』には書かれます。

そして、ふたりに共通するのは人々を癒すということ。どんな気分が悪いときでも、あるいは体調がイマイチなときでも、彼らを見ると心もからだもすっきりするのです。

彼らの発するのは「癒しの光」、ただの光ではありません。

桃太郎くんもそんな光を発するシャイニング桃太郎です。

シャイニング桃太郎、フェルッチ師と出会う

この子、養うほどにすくすくと大きくなりまさる。

保育園に行くほどに大きくなっても、桃太郎の身体から発する光は弱まることなく、家のうちは光満ち満ち、暗いところがないほどです。

お爺さんとお婆さんが喧嘩をしても…といってもお爺さんがお婆さんに叱られて落ち込むのが常でしたから喧嘩ともいえないものでしたが、それでもこの子を見ると、お爺さんもお婆さんも心が晴れやかになるのでした(これは『竹取物語』のパクリです)。

その噂を聞いた近所の人たちも、腹立たしいことや、苦しいことがあるとこの子に会いに来ます。すると、不思議なことに腹立たしいことも、苦しいことも消え失せて、すっきりして家に戻るのです。

「いや〜、今日もありがとうございました。これ、つまらないものですが」

「バカにするんじゃないわよ。こんなものをもらうためにやってるんじゃないのよ」

「わ、こちらもそんなつもりじゃ」

「用事が終わったら帰る、帰る」

せっかく、すっきりした気持ちがまたちょっと曇って、村人たちは家に戻るのでした。

しかし、桃太郎の力は絶大で、そこで誰いうともなく、この子のことを「ザ・シャイニング・ワン＝光る君」とか「シャイニング桃太郎」と呼ぶようになりました…って、これはアーサー・ウェイリー訳の『源氏物語』のパクリです。しかし、桃太郎もシャイニング・ワン（光る君）の名に恥じないプリンスとしての威厳はおのずから備わり、子どもなのに彼に会った人は自然にこうべを垂れてしまうのです。

それもそのはず。生まれたときに持っていた系図によると、この子の父親はどうも時の帝、今上帝、当今のエンペラーらしいのです。

となるとこの子はプリンスです。シャイニング・プリンス・桃太郎なのです。

さて、この村には《大賢人》がいました。賢人といっても猫です。が、猫といっても賢者です。名前はあります。

フェルッチ師（マイスター・フェルッチ）。

彼（猫）は、人語も操れば、笠竹も操る。風水も観れば、呪術も使う。医術も使うし、カウンセリングもする。フォーチュン・テラーでもあり、ヒーラーでもある。

フェルッチ師の生い立ちを誰も知りません。しかし、もとはこの村の住人（住猫）ではないことだけは確かです。天竺か、あるいはもっと遠くからこの村にふらっとやって来た、さすらいのカウンセラー猫、ヒーラー猫でした。だから名前も、そして言葉使いもちょっと異国語混

じりなのです。

お爺さんとお婆さんがこの子をフェルッチ師のもとに連れて行ったことがあります。自分の子どもがあまりに光り輝くので、心配になったからです。光り輝き、その光を浴びると、心も体も軽くしてくれるのはいいけれども、とはいえ少しは気味が悪くもある。

帝のご落胤っぽいというのも気になる。

「こんなところで育てていいものか、あるいは帝のもとにお返しすべきか」

それもフェルッチ師への質問事項のひとつでした。

拡大鏡を取り出したフェルッチ師は、この子を具に観察します。観察しながら、何度も何度も首を振ります。

「う〜ん、確かに光っている。キラキラ光っている。これからこの子のことを《ザ・シャイニング・ピーチ＝光る桃》と呼ぶことにしよう」

「あの、村の人たちは《ザ・シャイニング・ワン＝光る君》と呼んでいますが」

「それだと光源氏と間違えるだろう」

「まぁ」

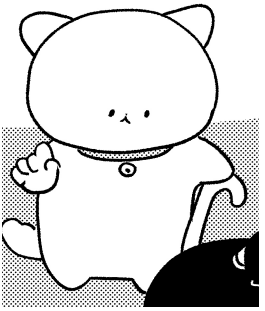
「だから、《ザ・シャイニング・ピーチ＝光る桃》なのだ」

「は、はい」

「それはともかく、この子は確かにエンペラーとなるべき人相は持っている。が、この子がエ

ンペラーになれば国は乱れるであろう。だからと言って、プレジデントやミニスターになればいいかというとそれも違う。う〜ん。まあ、そういうわけだ」

よくわからない占い結果を告げられたお爺さんとお婆さんは、結局、朝廷にいらっしゃる帝のもとに送り返すことはやめて、地元の公立の小学校に入れることにしました。



猫のフェルッチ師

猫のフェルッチ師は、イタリアのサイコシンセシス・セラピストであるピエロ・フェルッチ（Piero Ferrucci）さんから、その名をお借りしています。

ピエロ・フェルッチさんはフィレンツェ在住。サイコシンセシスの創始者であるロベルト・アサジオリから直接サイコシンセシスを学び、一九七〇年代から世界各国で指導しています。著書に『What We May Be（内なる可能性）』、『Inevitable Grace（人間性の最高表現）』、『Beauty and the Soul』、『Your Inner Will』、『The Power of Kindness』などがあります。

実際にお会いすると、とても深い目の色をされている方で、一緒にいるだけで癒されてしまいます。

人気者の桃太郎

「シャイニング桃太郎くん、かわいそうにね。あんなに頭がいい子なんだから、お受験させてあげればいいのに」

「あそこのお婆さんは偏屈だから」

「そうなのよ。工場ができて村の暮らしもよくなったというのにね。ほかの家と同じように、お爺さんを工場に働きに行かせればいいのに、お婆さんが反対しているらしいわよ」

「資本家に搾取されるのはイヤだなんてわけわかんないこと言ってるし」

「なに、資本家って」

「そんなの知らないわよ。でも、だから貧乏なのよ」

なんて近所の人たちは噂をしていますが、当の桃太郎は毎日、楽しく学校に通っていました。

小学校に入った桃太郎は、みんなの人気者。勉強もできるし、運動もできるし、性格もいい。全員一致で級長（学級委員）に選出され、先生からも好かれています。通信簿の成績もオール5（最高点）。「行動の記録」や「所見欄」にも、「みんなのリーダーとしてたのもしく思っています」と書かれ、お爺さんもお婆さんも鼻高々です。

ただ、ちょっと問題もあります。

「なあ、シャイニング桃太郎、俺たち鬼ごっこ

するけど、いっしょにする？」
「はい。します」
「よし、ジャンケンだ」

ジャンケン、ポン！

「あ、俺が鬼だ。十、数えるね。一、二、三、四（よん）…」
「あの、ちょっと待ってください。その数え方は正確ではありません」
「え」
「一、二、三と音（おん）で数えたら、次は《よん》ではなくて《し》というべきです」
「そんなことどうでもいいだろう」
「いえ、ダメです」

なんてことばかり言っているので、桃太郎を鬼ごっこに誘（さそ）う子はどんどん少なくなっていきました。彼の身に着いた「シャイニング性」が不正や不正確を許せないのです。
こういうシンプルな遊びには呼ばれなくなった桃太郎ですが、それでもみんな友だちであることに変わりはありません。
そして、なんといってもずっと仲のいい子がいたのです。

イチゴちゃんです。

イチゴちゃんは、桃太郎の隣（となり）の家に住む、同級生の女の子です。
集落（しゅうらく）の真ん中には広場があり、広場の真ん中には井戸（いど）がありました。村には水道が引かれて

いなかったのです。

その井戸の周りで桃太郎とイチゴちゃんはよく遊んでいました。三歳になった五月五日、子どもの日、ふたりは決めました。

「毎年、この日に、この井戸の井桁(いげた)に印(しるし)をつけて、どちらが先にこの井桁を越(こ)えるか、背比べしよう」

「たけ（丈）くらべ」です。

井桁の印はどんどん高くなり、ふたりはどんどん大きくなり、小学校に入る頃には互いを意識するようになりました。シャイニング・ピーチの桃太郎が年々イケメンに育っていったのはもちろんのこと、イチゴちゃんも子どもとは思えない光り輝くような美しさをそなえた女の子に成長してきました。

「お前ら仲がいいな」

「お似合いのふたり。うらやましい」

「付き合ってんじゃないの」

などとからかわれますが、品行方正(ひんこうほうせい)なふたりは疚(やま)しいことは何もしていないので、そんなことは気にしません。

桃太郎が級長（学級委員）になると、イチゴちゃんは副級長（副・学級委員）になりました。ふたりは子どもながらにテイラーやドラッガーの読書会をして、近代的な経営手法を身に着け、それはそれは見事な学級経営をしていました。

クラスの子たちも彼らのことは大好きで、かつ信頼もしていたので、「先生なんていなくて

も俺たちのクラスは問題ないぜ」なんて言っています。

体から光を発していることだけが、ときどきみんなから気味悪がられますが、それを口に出していう子は誰もいませんでした。

だって怖(こわ)いんですもの。

目が。

目の奥(おく)の光が…。

たけくらべ

『たけくらべ』は樋口一葉(ひぐちいちよう)の小説のタイトルです。

吉原の遊女を姉にもつ少女、美登利(みどり)と内向的な少年、信如(しんにょ)の物語ですが、しかし、その源流は日本最初の歌物語である『伊勢物語』にあります。

昔、幼なじみの男女が、丸い井戸の竹垣（筒井(つつい)筒(づつ)）の周りで、背くらべ（たけくらべ）をしたりして遊んでいました。しかし、成長するにつれて、互いに恥ずかしくなり、顔を合わせることもなくなった。しかし、二人とも相手のことを忘れることができず、やがて歌を送り合って契りを結んだというお話です。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ
過ぎにけらしな妹見ざるまに

イチゴちゃんの失踪（しっそう）

月日は経ち、桃太郎やイチゴちゃんが五年生になったある日、事件が起きました。

夜もだいぶ更けた頃、隣のお婆さんが桃太郎の家に飛び込んで来たのです。

「うちのイチゴ、知りませんか」

「え、夕方まで井戸の周りで一緒に遊んでいましたが」

「それからお使いを頼んだんだけど、お使いから帰って来ないのよ」

最初に思ったのは井戸の中に落ちたのではないかということ。

「お婆さん。僕のからだを縛ってください」

「え？」

「僕の体に縄を巻いてください。僕が井戸の底まで降りて見て来ます」

「そんなお前、今は夜だよ。蝋燭の灯りていどでは何も見えないよ」

「お爺さん、お婆さん。僕を甘く見ないでください。何といってもザ・シャイニング・ピーチ＝光る桃ですよ」

「おお、ガディ（Got it）！」

お婆さんは桃太郎を縄で縛って、井戸の中に降ろします。

「お～い、何か見えるか～い」
「は～い！見えることは見えますが、イチゴちゃんはいません」

近所の人たちも一緒になって、村中・山中を探します。ザ・シャイニング桃太郎を懐中電灯代わりに先頭に立たせて一晩中探しましたが、とうとう見つけることはできずに朝を迎えました。

翌朝、小学校ではイチゴちゃん失踪の話題で持ち切りです。
子どもたちは、桃太郎以外はイチゴちゃん探索には参加させてもらえなかったので、桃太郎を囲んでいろいろ質問をします。

桃太郎は井戸の中を探索したこと。村中を探し回ったこと、森の中にも行ったこと、夜の森はこわいよ～なんて話も、問われるままにしました。

「心配だよね～」
「今日は俺も探すぜ」

などと同級生も心強いことを言ってくれます。

「は～い、みなさん、静かにして自分の席に座ってください」

担任のヒツジ先生が教室に来ました。

「イチゴちゃんのことは聞いていますね。心配ですね。これから学級会にしますから、何ができるか話し合いましょう」
「は～い」
「では、級長の桃太郎くん、司会をしてください」

それから始まった学級会。いつもの学級会とは違って活発に意見が出ました。みんなの頬も紅潮して、なんか楽しんでいるようにも見えます。

「俺たちもイチゴちゃんを探したいよな」
「でも、子どもが騒ぐと、問題をより複雑にしちゃうんじゃないの」
「なんだよ、お前、イチゴちゃんがどうなってもいいっていうのかよ」
「そんなこと言ってないわよ」

イチゴちゃん探索をするかしないかで侃々諤々の議論がなされます。なかなか決まらないので、「じゃあ、多数決で決めるか」と言い出す子がいました。

「いやいや、多数決が民主主義ってわけじゃないから」と桃太郎。

「自分は探したくてもお父さん、お母さんが反対する友だちもいると思う。探したい子だけが探せばいいんじゃないだろうかな。無理強いはよくないと思うよ」
「じゃあ、そうしよう。俺が村の地図を作るから、みんな、手分けをしようぜ」

「それはいいね」
「私もイチゴちゃんを探したいけど、暗くなるとお父さんやお母さんから外に出ちゃダメだと言われるから、昼のあいだだけ探すね」

そんなとき、校長先生がやってきて、ヒツジ先生を教室の外に連れ出しました。戻って来た先生は、ちょっと困ったような顔をして、「今日は、学校はこれでおしまいにします。みなさん、お家に帰ってください」と言いました。

「やった〜、休校だ！」
「よし、一度うちに帰ったら井戸の周りに集合な」
「お〜！」
「は〜い！」
「じゃあ、僕はお婆さんにお願いして、みんなの分のキビ団子を作ってもらうね」
「おお、桃太郎んちのキビ団子、うまいからなぁ」
「楽しみ〜！」

みんなわいわい言いながら家に帰って行きました。

「なぜ、とつぜん休校になったんだろうか」

桃太郎はしかし、釈然としないまま家に戻りました。桃太郎のお爺さんは山に柴刈りに行って留守でしたが、川に洗濯に行く前のお婆さんにお願いしてキビ団子を作ってもらいました。

「よっしゃ！」

お婆さんはタスキをかけて腕まくりをし、まるで自動キビ団子製作器のような速さと正確さでせっせ、せっせとキビ団子を作って行きます。

実はお婆さんは、料理は面倒でキライだし、正直いって苦手なのですが、なぜかキビ団子作りだけは大好きなのです。クラスのみんなに配れるくらいのキビ団子を持った桃太郎は、井戸のところに行きました。

「ここでイチゴちゃんと遊んだな」

井桁の背比べの傷を眺めながら、桃太郎は思い出に浸っています。三歳の頃からの思い出が走馬燈のように脳裏をかけ巡ります。

カー、カー！

「わ！」

カラスの声で気がつきました。どのくらいそうしていたでしょうか。日も山の端にかかろうとしています。

「みんなどうしたんだろう」

そこに三匹の友だちだけがやって来ました。

ご存知、犬、猿、雉です。ちなみに犬はイヌヅカくん（男子）、猿はサルタくん（男子）、雉はキジマさん（女子）です。

犬・猿・雉たちと鬼退治に出かけるぞ！

「ほかの子は？」

「え、シャイニング桃太郎くんちに連絡行かなかった？」

「連絡って」

「緊急連絡網のLINEよ」

「あ、うちの婆ちゃん、LINEやってないから」

「そうなんだ」

「イチゴちゃんが　ワン　見つかったらしいよ」

「おお、それはよかった。うちはイチゴちゃん家の隣だから帰ってみるね」

「それがよくもないんだよキャッキャ」

「え？」

「鬼塚デビルって知ってるでしょ」

「あの鬼の一族の中学生の…」

「そうよ。イチゴちゃん、鬼塚デビルに連れて行かれたらしいの」

「なら、取り返しに行こうよ。警察に行ってもいいし…」

「それがね…」

「なに？」

雉のキジマさんがいうことには、鬼塚デビルのお父さんはお金持ちの実業家で鬼塚工業のCEO（最高経営責任者）。近年、この村にその工場、鬼塚工場ができた。その工場のおかげで村の暮らしはよくなった。そして、うちのクラスのほとんどの親はその鬼塚工場に勤めている

から何もいえないという。

「初めて聞いた！」

桃太郎のお爺さんとお婆さんは、山に柴刈りと川で洗濯が仕事なので、鬼塚工場には勤めていない。そのような大人の事情にはまったくうとい桃太郎なのでした。

「じゃあ、君たちはなぜ来てくれたの？」

「俺の親も工場で働いてないからなワン。採用条件が中卒以上なんだよワン」

「わたしの親も尋常小学校しか出ていないし、それにうちは貧乏で夜ご飯がないからキビ団子にひかれて…」

「まあ、経済的徴兵制ってやつだなキャッ」

「そうか」

桃太郎は、工場建設による村の発展と、それに伴う経済的格差の広がりについてひとしきり思いを巡らせていました。

が、そのときイヌヅカくんがワン！と叫び…

「いまはそんなことより　ワン、どうやってイチゴちゃんを助け出そうか考えろよ」

「そうだ、そうだキャッ」

「あ、ごめん、ごめん」と桃太郎。

「ところでイチゴちゃんがどこに連れ去られたかはわかってるの」

「わたしがちゃんとリサーチ済みよ」

「さすがキジマさん！」

キジマさんによれば、鬼塚デビルの家には離れがあって、そこには親も入って来ず、不良のたまり場になっているという。イチゴちゃんはそこに軟禁されているらしい。

「じゃあ、これから鬼塚デビルん家に行こう」

「でも、相手は不良だぜ。しかも、たまり場ってことはいっぱいいるかも。俺たちだけで大丈夫かなワン」

正直いって桃太郎もそれは心配でした。だって、ここに集まってくれた三匹はケンカだって強くないし、勉強もあまりできない。彼らは頼りにはならない。ここは自分が何とかしなければと思いました。

「大丈夫。僕に任せておいて」

「どうするの」

「相手だって人間だよ」（みな、心の中で「鬼だけど…」と思っていましたが、それを口に出していうことはしません）

「心を開いて話せばわかるよ」（みな、心の中で「そっかなぁ…」と思っていましたが、それを口に出していうことはしませんでした）

「みんなも手伝ってね」

「お、おう！」

「じゃあ、行こう！」

「シャイニング桃太郎くん、あれあれ」とキジマさん。

「え？」

「キビ団子…」

「あ、そうだ。忘れていた」

桃太郎はバスケットの中からキビ団子を取り出し、ひとりにひとつずつ渡しました。

お婆さんはクラスの生徒全員分のキビ団子を作ってくれたので、まだまだいっぱいあるのですが、「ここにいる人（じゃないけど）だけにあげるのは不公平になる」と残りをまたバスケットに入れたのです。

「公平」と「平等」の違いをまだ知らない桃太郎です。

経済的徴兵制

おそらく多くの人が「戦争なんてしたくない」と思っているでしょう。だから兵隊にも取られたくない。国民の多くが「戦争になんか行きたくない」といっている国や、強制的な軍隊への入隊システムである徴兵制がない国などで「経済的徴兵制」が行われます。

経済的徴兵制とは、貧しい若者に対して、軍隊、あるいはそれに準ずる組織（自衛隊等）に入隊すれば、経済的援助を与えるということで入隊を誘うものです。特に「大学等への学費を免除する」とか医療費が無料になるとかね。

イヌヅカ君、サルタ君、キジマさんも貧困なので、キビ団子にひかれて桃太郎のもとに来たのです。

鬼塚、こわい！

いな」

部屋中にはタバコの煙がもくもくもくもくと充満しているし、ビールや日本酒の空き瓶も転がっている。部屋の端には雀卓もあります。

鬼塚デビルの部屋のソファの上には、昨夜、拉致されたイチゴちゃんが縛られて横たわっています。

「こいつ、いつまでもうるさいから猿ぐつわでもするか」

…と猿ぐつわをしていると、トントントンと部屋をノックする音。

「オラオラ、いつまで泣いてんだよ。そんなに泣いても誰も助けにゃ来ねえぜ」

「お前、五年生のくせになかなか色気があるな」

「顔もかわいいしな」

「やめて、触らないでよ！」

「おお、こわ。そうやって怒る顔もまたかわい

「やば。お前の親か！」
「いや、親が来るはずはない。誰だ」
「あの…」
最初に顔を出したのは猿のサルタくんでした。
「なんだテメエ！」
「あの、こちらにイチゴちゃんはいますかキャッ」
「いねぇよ、そんなの」
「あ、そうですか。すみまんでしたキャッ」
「使えないなぁ」と思った桃太郎。しかし、それは口には出さずに「じゃあ、次はイヌヅカくん、お願い」
「ワン、ワン」
「なんだオメエ！」
「ワン、ワン。さよならワン！」
イヌヅカくんも戻って来てしまいました。
「なぜ、みんな帰って来たの」
「だって、鬼のような顔をして怖(こわ)そうなんだもんキャン」
「そりゃあ、鬼だから」
キジマさんは「ひとりでは行きたくない」と言っています。

「じゃあ、みんなで行こう」

犬を先頭に、猿、雉、そして桃太郎と続いて不良部屋に向かいました。

トントントン

「なんだ!またテメエらか」

ドアを開けた鬼塚デビルはびっくりしました。犬、猿、雉の後方から、キラキラしい光を背負った貴公子が現れたからです。

「わ、わ」

鬼塚デビルは腰を抜かしてしまいました。

桃太郎は威厳のある口調で言いました。

「イチゴちゃんを返しなさい」

「なんだ。声はガキじゃねぇか。オメエは誰だ」

「僕はイチゴちゃんの同級生で桃太郎、人呼んでシャイニング桃太郎と申します」

「なんでぇ、そのシャイニングなんとかってのは（笑）。で、何の用だ!」

「イチゴちゃんを返してほしくて来ました」

「返さねえよ」

「それでは未成年者略取・誘拐になりますよ」

「何が略取・誘拐だ。こいつは自分から進んでここに来たんだぜ」

「う、う」

イチゴちゃんは違う違うと首を振りますが、猿ぐつわのために言葉にすることができません。

「本人の意志は関係ありません。未成年者略取・誘拐の場合はかりに本人の同意があっても、成立するのです。刑法224条で三か月以上、七年以下の懲役です」

「小賢しいガキだな。そんなの関係ねぇって言ってるだろうが。だいいち俺は未成年だし」

「警察に行きますよ」

「おお、行ってみろよ。警察なんぞこわくはねぇよ」

そうなのです。鬼塚一族の力は司法にも及び、警察・検察だって鬼塚一族の言いなりなのです。

「ぐ…」

「なんだ、ぐうの音も出ねぇのか。帰れ、帰れ！」

鬼塚はその顔を桃太郎の顔にぐっと寄せて来ました。

「こわっ」

ちょっとおしっこをチビりながら、ひとりと三匹はすごすごと退散することになったのです。

「君たちも何か言ってくれればよかったのに」

自分も鬼塚デビルにビビったのに、桃太郎はちょっと不満です。

「もっと命をかけてくれてもいいと思うんだよね」

「キビ団子ひとつだとあれが限界だよワン」

「僕たちも報酬分の働きはしたと思うよキャッ」

「シャイニング桃太郎くんに任せておけば大丈夫だと思ったのよ」

「そうだよ。いつも自分はシャイニング桃太郎、プリンスだと言ってるだろうワン」

「だから下手に手を出しちゃいけないと思ったんだよねキャッ」

確かに自分はザ・シャイニング桃太郎だ。そしてプリンスだ。プリンスは何でも自分でできなければならない。あるいはひとりで解決し、あるいは将として部下を率いて戦わなければならない。

しかし、この問題を解決することは本当に自分にできるのだろうか。そして、どうやったら彼らはもっと力を貸してくれるのだろうか。

桃太郎は、生まれてはじめて、人生の壁にぶち当たったのです。

こういうときに頼りになるのは大賢人である猫のフェルッチ師です。

桃太郎と仲間たちはフェルッチ師のもとに行

き、かくかくしかじかとこれまでの経緯を説明しました。

黙って聞いていたフェルッチ師。しばらくすると言いました。

「うーん、そうか。シャイニング・ピーチくん。わかったよ」

「え、そうなんですか」

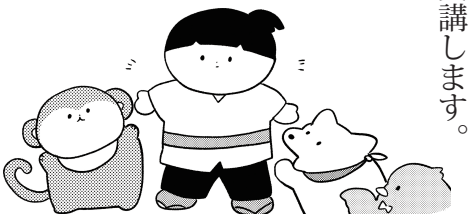
「ああ、君の問題はオーバー・アイデンティフィケーションだな。そして君に必要なのはディス・アイデンティフィケーションだ」

「何いってるんだか、全然わかりません」

「え、全然？」

「はい、全然」

「そうか。じゃあ、もう少し分かりやすく言おう。君の問題は《過剰な自己同一化》で、必要なことは《脱・同一化》だということだ」

「それも全然わかりません」

それでは…ということで、ここでフェルッチ師はサイコシンセシス講座を開くことになりました。イヌヅカくん、サルタくん、キジマさんも桃太郎と一緒にこの講座を受講します。